

文部科学省

「令和4年度 学校卒業後における障害者の

学びの支援に関する実践研究事業」

ともに いるだけで 学びになる

～福祉とアートの現場から～

認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ



目次

事例①
わかりあわないまま、ともにいる
～障害者施設アルス・ノヴァの日常～
高林洋臣（クリエイティブサポートレッツ） …… 3

事例②
石と鉛の在野探求家・久保田社の
活動を通じて考える
～街との協働から生まれる「学び」～
ササキユイチ（クリエイティブサポートレッツ） …… 4

「ともにいるだけで学びになる」
ともにいた人たちの声
（アンケート回答集） …… 5

事例③
人生の交差点
～重度知的障害者とのシェア生活～
高本友子（新聞記者）、
原菜月（ライター・NPOスタッフ） …… 7

事例④
「いろいろな人」の中に自分もいる
～障害者施設と学校の協働による学び～
夏目はるな（クリエイティブサポートレッツ） …… 8

共に学び、生きる共生社会
コンファレンス
「ともにいるだけで学びになる」
～福祉とアートの現場から～
ラウンドテーブル …… 9

ラウンドテーブル登壇者 …… 11

総括
「アート」を「学び」に
置き換えてみた
～ただいだけで学びになる～
久保田翠（クリエイティブサポートレッツ代表） …… 11

クリエイティブサポートレッツ（以下、レッツ）は、今年度、文部科学省の「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」を受託し、主に重度の知的障害のある人の生涯学習の支援について検討してきた。言葉によるコミュニケーションが不得手な重度の知的障害者は、講座や教室のような形で学ぶことは難しい。それでは、彼らの学びの支援とは何なのか。2023年1月21日に開催したコンファレンスで、神戸大学の津田英二教授が講演した「学び」に関する講義をもとに整理してみる。

生涯学習の機会は、講座や教室などに限らない。学校教育のことを「フォーマル教育」、学校外の講座・教室などを「ノンフォーマル教育」と分類するが、どちらも学習者と教育者が共に学習する・させる意図性がある。人が学びを得る場面は他にもあり、教育者が学習者どちらか一方がそれを意図していない「インフォーマル教育」や、両者に学習の意図がない中で生まれる「偶発的な学び」もある（図1）。重度の知的障害者の学びの支援は、教育者は学びを意図しているが、学習者は無意識に学んでいるインフォーマル教育の機会をいかに作るかということになる。

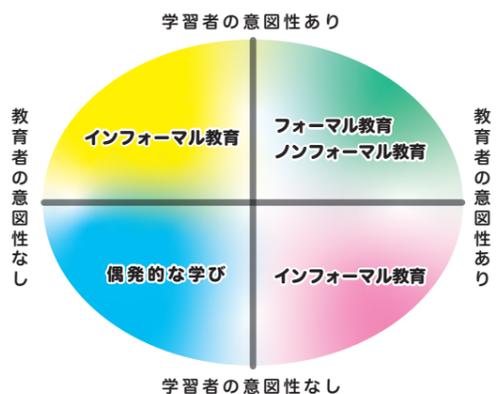


図1（出典：津田英二講義スライド）

また、元国立市公民館職員の平林正夫は、社会教育の出発点は場づくりにあるとし、学習にこだわらず、気軽に行けて、色々な人との出会いがあり、様々な交流を経て、何か目的を持ち活動を始めるための、無意図的・無目的な場を「たまり場」と呼んだ。それに関する論考を引用する。

“たまり場”において、始めの段階は「学習」や「教育」をさせようとせず、まず「出会い」を大切にしたいと考えている。「出会い」というのは自分の意識性からだけでは成立しない。「出会い」とはある人や物を媒介としながら、結局、自分自身の無意識の部分と出会う一気づくことではなからうか。どうしてそんなに学習や教育を優先しなければならないのだろうか。気づきのない学習はあたかも発見のない探検、あるいは出会いのない旅をするようなものだ。
（平林正夫「たまり場」考 長浜功編『現代社会教育の課題と展望』明石書店、1986年、p.146）

学びの支援とは、この「出会い」の機会をいかに作るかと考えることができる。重度の知的障害者は、活動場所が家か福祉施設に限られていることが多く、人や物に新たに出会う機会が一般の人より少ない。それが学びの機会の少なさの原因になっていると考える。本誌の事例①では、人を媒介とした出会いを増やすため、重度の知的障害者と「ともにいる」ためのヒントを、レッツが運営する障害者の通所施設アルス・ノヴァを例に紹介する。事例②では、浜松市の中心市街地にあるシェアハウスで、ヘルパーサービスを利用して生活している重度の知的障害者、久保田社さんを例に、彼とまわりの人たちとの生活を通じた学びについて考察する。
一方で、自分自身の無意識の部分に気づくような人・

物に「出会う」機会が少ないのは、重度の知的障害者に限らず、多くの人にも当てはまるのではないだろうか。常識と大きく異なる価値観で生きている重度の知的障害者と「ともにいる」ことは、障害者に学びの機会を提供してあげるといふより、むしろ「ともにいる」側の方が学ぶことが多いのかもしれない。事例③では、2人の新聞記者がシェアハウスで重度の知的障害者たちと過ごし、考えたことを紹介する。事例④では、小学生が障害福祉施設を訪問し、いわゆる障害者理解ではなく、障害者と「出会う」プログラム「GOGO! たけぶん探検隊」について紹介する。

本誌の事例は、いずれもこの事業の前からレッツが実践してきたことで、今回は「学び」という視点から、それらを捉え直し紹介した。普段は、文化・アートの活動をする事が多く、その中で考えてきたことが今回の事業にも大きく反映されている。アートの視点については、アーティストでもある東京藝術大学の日比野克彦学長に、コンファレンスのラウンドテーブルで語ってもらった。ラウンドテーブルでは、他にも「ともにいるだけで学びになる」というテーマから派生して、常識的であることや無駄の価値、障害者と支援する・される以外の第三者として関わる葛藤などについて話し合った。

本事業は、障害者の学びの支援が主題だが、障害者の学びを考えることで「学び」の捉え直しを行い、結果的に障害の有無に関わらない「私たちの学び」を考える機会になった。障害者／健常者だから違うのではなく、本来、人は皆違うもので、それぞれが持つ価値観が尊重され「出会う」ことで、ともに学ぶことができる社会が実現する。そうなれば、自ずと障害者の学びの機会も広がっていくだろう。

わかりあわないまま ともにいる

～ 障害者施設アルス・ノヴァの日常～

高林洋臣（クリエイティブサポートレッツ）



社会では不必要とされ、問題とすら判断されてしまうような行動。障害福祉施設アルス・ノヴァでは、それらも「表現」として尊重しています。それぞれが好きなことをするため、全体で行う作業やレクリエーションはありません。でも、何もしないわけでもありません。「何もしない」をしている、そんな利用者の日常を一部紹介します。

ルーティンワーク「カレンダー」

亮賀さんは、自分で日課を作るのが上手な人です。平日午後は、本人が「おだゆい」と呼ぶ書き取り活動の時間。紙に同級生の名前をずらっと羅列していきます。土曜日はアルファベットの日で、ひたすら文字を書き続けます。そんな彼のこだわりの一つが、カレンダーです。街中で見かけると、よその家やお店でも構わず飛んでいき、破ってしまいます。最近では、アルス・ノヴァ2階の壁一面にカレンダーを貼るのに夢中です。月が替わると古いものを全てはがし、スタッフにあらたに書かせた手作りカレンダーへ貼り替えます。大量のセロテープを使い、ラミネートするように壁に固定します。

水濡れイノベーション

Kさんは水に濡れるのが好きで、夏場は一日に何回も水浴びをします。ただ、冬や屋内でも衝動は抑えられません。洗面所でバケツに水をためて被ったり、持参したジュースを頭上でひっくり返したり。

辺りは水浸し、本人も寒そうで、周りは困ってしまいます。

やめさせようとしても、彼は次々に新しい濡れ方を発明します。肌着や靴下だけ濡らしてみたり、水を入れたビニール袋をポケットに忍ばせ、徐々にズボンを濡らせてみたり。もはや感心してしまうようなイノベーションを起こしていきます。本人の欲求は尊重したいものの、体調や衛生面を考えると譲れない面もあります。葛藤する中、どちらにも振り切らず、いわば解決を保留し続け、現在に至ります。

「パプリカ」であいさつ

Sさんはとても陽気な人ですが、何かに熱中すると他のことがぞんざいになってしまいます。こちらが挨拶しても気のない返事があるかないかで、呆れることも多々ありました。

ある日、私が「パプリカ」という曲に合わせてでたらめに踊ったのを気に入り、それから会うたびにリクエストするようになりました。私の顔を見るなり、曲の一節「は～れた空にたね～をまこう」を歌うのです。

最初は全力で踊って応えていましたが、すぐに面倒になり、「鼻クソをほじって、空に向かってはじく」といった仕草で応じるようになりました。Sさんは「おええ」と嫌悪感を示すものの、歌いかけるのをやめません。イラスト制作中、顔をあげないまま歌いかけてきたり、遠くの人混みから私を見つけて歌いかけてきたり。定型ではなく、相手に合わせたコ

ミュニケーションを取っていて、これが本当の挨拶なのだと教えられました。

アルス・ノヴァでは、定期的に「しえんかいぎ」と呼ぶ会を開いています。スタッフ、本人、家族、時には一般の人も加わり、利用者についてあれこれ話す場です。具体的な対応をまとめるわけでも、その人への理解を深めるわけでもありません。なぜなら人は、いつ・どこで・誰と・どのように関わるかによって大きく違う、多面的な存在だからです。参加者が普段の関わりや思いを共有し、それぞれの「偏った」理解をなくしていくのが、「しえんかいぎ」の狙いです。

新しい利用者が来るとき、本人の課題や配慮項目が書かれた引継ぎ資料が届きます。もちろん助けになる部分もありますが、問題ばかりに注目してしまうと、必要以上に緊張が伴います。だからと言って、その人の良い面も共有すればいい、という話ではありません。

大切なのは、共に過ごすことで互いを知り合う、時間や余裕を持つことだと思います。効率やルールが重視され、正解を求めがちな今の世の中では、実はとても難しいことです。たとえトラブルが起きても、共にいられる場所を持ち、葛藤しながら付き合っていく。障害の有無に関わらず、互いの価値観を尊重し合える場所こそ、学びが生まれるのだと思います。

石と飴の在野探求家・久保田社の活動を通じて考える

ちまたセッション ～ 街との協働から生まれる「学び」～

ササキユーイチ（クリエイティブサポートレッツ）



クリエイティブサポートレッツ（以下、レッツ）の久保田社さんは、現在26歳。重度の知的障害があり、言葉で自分の状態を伝えるのが難しく、食事や排泄など生活全般に介助が必要です。睡眠障害やてんかん、側弯症もあり、細やかなケアを要します。2019年からは親元を離れ、浜松市中心部のシェアハウスを拠点とし、ヘルパーの公的なケアを使って暮らしています。2人の重度知的障害のあるシェアメイト、併設されたゲストハウスにやってくる旅人ら、そして複数の介助者たちと関わりながら、ご飯を食べたり、散歩したり、ライブハウスや歯医者に行ったりして、私たちと同じように街で生活しています。私も介助者の一人です。社さんには、熱中していることが二つあります。キーワードは「石と飴」です。一つ目は、石遊びと呼ばれる小石をタッパーやお椀に入れ、カチャカチャと音を鳴らす行為です。「そんなことか」と思うかもしれませんが、眠りに落ちる直前まで鳴らそうとするほど、彼にとっては大切なことです。毎日石に触れているので手の皮は厚く、熟練の職人のような迫りがあります。街を歩いていると、駐車場や建物のすきまなどの補給スポットで立ち止まり、石を拾って鳴らすのがルーティーン。石は手元からぼろぼろとこぼれ、また街へ「帰って」いきます。彼との散歩は、普段とは全く違う街の見方を教えてくれます。

二つ目のキーワードは「飴」。きっかけは、介助者と日常的に通っているスーパーや

コンビニでした。売り場に陳列された飴の袋にやさしく触れ、音を楽しみます。くしゃっと握る時もあり、こちらはヒヤヒヤします。自分からレジに持って行って購入することもあります。介助者が買おうと手に取ると「世界の秩序が乱れる！」と言わんばかりの形相で棚に戻そうとします。私たちはこの行為を「アメ活」や「アメ鑑賞」と呼ぶようになりました。

「アメ活」という言葉は、葛藤から生まれたものです。社さんの強いこだわりにつき合うことは、一筋縄ではいきません。時には菓子売り場から1時間以上動けなくなってしまうし、本人が苦しんでいるように見えることもあります。「彼の欲望とどう付き合えばいいのだろう」と戸惑ったり、時には取り乱したりしながらも、彼との関わりを続けていくため、プロジェクトとしてとらえるようになりました。

レッツのイベントで社さんの「アメ活」を目撃した人と地域の百貨店で遭遇し、「本当に飴売り場にいるんですね」と言われたこともあります。一方、体調が不安定だった時に社さんが店の棚を荒らしてしまい、あやうく出禁を宣告されそうになったこともありました。のちに「またおいで」と言ってもらえましたが、介助者としては落ち込みますし、二の足を踏んでしまいます。

社さんの行動から考えられる「学び」は、三つあります。一つ目は「何かをやり続けることも大切な学びだ」ということで

す。今回のコンファレンスに向けて開かれたワーキンググループで、参加者から「生涯学習は、社会で抑圧された自分らしさをもう一度取り戻すプロセスだ」との意見がありました。奪われそうになりながらも手放さずに続けている社さんの石遊びは、彼の「存在にかかわる学び」なのだと思います。

二つ目は「経験は学びを担保する」ということ。社さんは言葉ではなく、実際の経験をもとに「この環境は嫌だ」「ここは心地いい」などと態度で意思を示します。アメ活も、日々の買い物の中で育まれたものです。

そして最後は「コミュニティの中での学び、そしてコミュニティを育む学びがある」ということ。社さんは生活のほとんどの場面で介助者と共に行動します。ここでは、時にすれ違いや葛藤も生まれます。社さんが何を考えているのかを彼に関わる人たちが模索し、やり取りを続けていることから、社さんと介助者たちの関係は共同研究者のようなのだと言えます。そしてこのコミュニティで生まれた学びや関係性は、支援職以外の人との関わり、すなわち街へもにじんでいるのではないかと考えています。

「ともにいるだけで学びになる」 ともにいた人たちの声

コンファレンスの参加者からアンケートでたくさんの感想・意見をいただきました。その中の一部を紹介します。

「ともにいる」コンファレンス

壮さんや太田さんが舞台上や客席を歩き回ったときは、びっくりしたけど、そのうち歌舞伎の花形役者登場みたいな、内容の濃い舞台や映画を見たようだった。

子供と一緒に参加して、なかなか集中して聞けなかったのは残念でしたが、自分自身、子どもにも貴重な場でした。大人たちが話し合う場で、突飛な行動や自由な振る舞いがなんの違和感もなく「なじんで」いる不思議な空間でした。

重度知的障害の方々と同じ空間で過ごすのが初めての体験でした。皆さん、やりたいことをやっていて、シンポジウムとしても成立している状況、まさに目の前で実証されていましたね。

障害福祉の現場

やりたいことと、やっていることの大きな差異に日々心が引き裂かれています。このわくわく感をどう事業所に取り入れていけるか考えてみます。

現場の固定的な価値観に向き合うしんどさ（子どもや保護者の方がしんどいのでしょうか）を何とかしたいと改めて思いました。

シェアハウスの体験談は空気が変わりました。普段、福祉の現場にいるものとしては、とてもおすすめできない体験のようでもあり、でもそこに飛び込む人、受け入れる側はさすがだなと思いました。精神的に疲れた人を癒す場として重度知的障害者の施設は成立するような気がします。

恥を知って強く生きていく

ラウンドテーブル最後の「恥を学んだ」という発言に感銘を受けました。自分自身のアート活動もそういうことだと思ってやってきました。

「恥」という言葉で語ってくれた方の登場が、「なんかいいかんじのイベントだった」みたいに終わりそうだったのを、私たちの足元にちゃんと目をむかせてくれて、「障害があってもなくても誰でも一緒に生きているんだ」という全体像を逃さずに済んだ気がします。

最後に発言された当事者の方の言葉や思いも、けっして無視したり軽視してはいけません。アート重視な発想だけだとそれまで一生涯懸命「普通の」社会に受け入れられるためにという教育を受け、まじめに努力してきた障害のある人には、納得できないところもあると思います。



重度知的障害者を知った

とにかく好きなことをやっていて、正直うらやましいと思う部分がありました。

「違う」「別の」イメージではなく、私たちと同じように考え生活しているのだと感じました。

支援する・されるの外側、第三者の話聞いて、接し方がわからず目をふせるのではなく、好奇心を持って接しようと思いました。

学びの捉え直し

学びの場は、何でも許されるような感じで自由でないと、体験を通して学ぶことなんてできないなと思いました。

インフォーマル教育の話聞いて、ともにいるだけで学びになるという今回の伝えたいことが理解できた気がします。

「ともにいるだけで学びになる」には、そのシステム・環境を作る必要があることを改めて感じた。

全体として「学び」⇔「対話」のように思いました。

重度知的障害者の学び

言語化できない人にとって、どのような学びになったのか知りたい。どうやってそれを知り、考えるのか。

障害のある人は何を求め、何を学んでいるかは説明が難しいと感じていた。ラウンドテーブルで太田さんの舞台上の行動に対して日比野さんが「彼は何かを感じ、この場で理解し、行動を合わせ」のような発言があったとき、障害者の学びの概念を自分自身がひろげなければと気づかされた。

学びにならなくても良いと思う。一緒にいるだけで良いのでは...

障害者の学びがテーマだったが、障害者と共に過ごした健常者がどう学んだかの話が多かったように思った。

インクルーシブ教育の中で、特別支援学校・学級の存在が悪いことになっている風潮が気になり参加しました。教育って何でしょう？

常識・ルールを疑う

「常識」とは何だろう？誰がいつ作ったものだろうかと考えをめぐらせていました。「フツー」「常識」という言葉の持つ負の側面を掘り下げて考えていくよい機会でした。

「常識／正常／健常／迷惑／無駄ってなんだろう」と思った。無意識に「枠」をつくっているんだろうな。

高本さんの「自分自身だけは、自分を許せなかった」という話は、ばくも同じような気持ちを持っているのでとても共感しました。

社会の歪みとか、消費とか、常識とか、正解のない悩みを持ちながら「にじみ」のある部分をうまく許容して工夫している自分になりたいと感じます。

「多様性を受け入れる」と「ルールを守る」ことを学生に伝えることは苦しいと感じていた。しかし、ルールはルールを守ることが目的ではないことをもう少し丁寧に考えてみようと思う。

電車の中でうるさい子どもとか、ルールを守らない後輩とか、仕事をしない上司とか、食べ過ぎちゃう自分とか許せるなと思いました。



腕を伸ばしてこのあたりがアートかな？としていくとき、その腕の中に「詩」や「文章」も含まれていくといいなと率直に思いました。今回は、「ことば」が健常者の側のものだった。

「アート」と「アートの」の違いはあるのか？「アート」は、どういうことを言うのか。



無駄なことは悪いこと？

他人が勝手に無駄と言ったことも、本人にしてみると決してそうではない。常に迷いつつ、そこを否定せず一緒に生きるという姿勢に改めて共感しました。

無駄なことと言ってしまうれば何でも無駄になってしまいますね。自分を大切にしたい。気持ちよく無駄を守りたい。

学びの定義は難しく、そこには先験的に「無駄」はないようなので、いろいろ考えました。たけし君の「アメ活」は誰にでもあることだと実感し、とても救われました。

ある行為や存在に対して、「無駄である」「障害者はできることが少ない」という捉えではない、多角的な視点からの捉え方に気づくために、「ともにいること」が大切なのだと思いました。

分からないところを引き受けるアート

「分からないところはアートが引き受ける土壌」という日比野さんのお話は、私がおもちゃやしていた気持ちをパツと言いつける言葉でした。

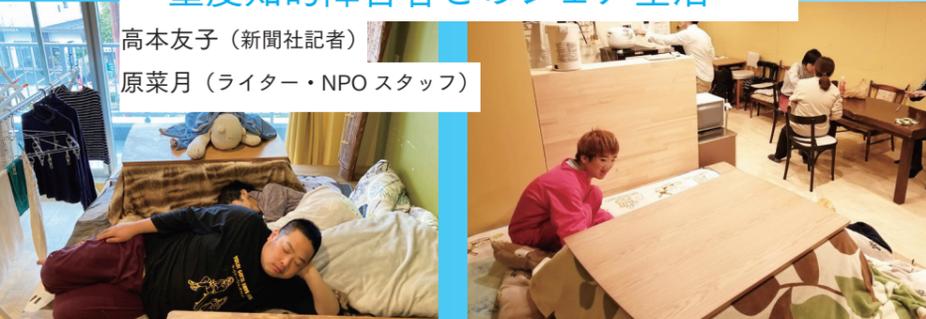
生きることは表現すること。かわりの中で新たな表現は生まれる。それをどうとらえるのか、関わる大人の態度が左右する。善悪や無駄が有益かだけでなく、アートとしてグラデーション（にじみ）として捉えるのがしっくりくる。

人生の交差点

～重度知的障害者とのシェア生活～

高本友子（新聞社記者）

原菜月（ライター・NPOスタッフ）



ひとまず友人になってみた —高本友子

大学時代の友人で、クリエイティブサポートレッツ（以下、レッツ）のスタッフでもある久保田瑛さんに「いつかおいでよ」と誘われたのを思い出し、2020年9月、レッツが運営するシェアハウスに1か月滞在しました。私が多忙な業務に限界を迎え、休職していた頃です。空白の期間が怖くて、「何かやらなきゃ」と焦っていました。

シェアメイトは壮くん、太田くん、舞さんの3人。重度の知的障害があり、ヘルパーサービスを利用して生活しています。それぞれに個室がありますが、リビングやお風呂は共有です。レッツのスタッフは「いるだけでいい」と言ってくれましたが、本当に何もすることがなく、また焦りに近い感情を抱いていました。

慣れてきたのは1週間後くらい。「ただ、いる」をどう実践しようか。そもそもなぜ「いるだけでいい」と言われるのか。それはきっと、利用者へのまなざしそのものだ、と思い至りました。例えば、壮くんは石を鳴らす遊びに夢中ですが、誰も「何のために？」とは問いません。でも、そのまなざしを自分自身には向けられていませんでした。長らく「何か成果を出さなきゃ」と思って生きてきたからです。まずは、自分がただ存在することを許してあげたくなりました。

「シェアメイトと一緒に生きるってどうということだろう」と考えた結果、ひとま

ず友人になろうと思いました。例えば、介助者は壮くんにご飯を食べてもらおうと色々工夫するけど、本人は口元に運ばれたスプーンを払ってしまう。そこで私は壮くんの友人なので、彼に食べるように働きかけません。ご飯を食べたくない日もあるだろうし、友人に「ご飯食べなよ」と注意することは、ほばないからです。空気を悪くしないために、ただ笑っていました。何も解決しないけど、とりあえず状況を肯定する。介助者にとっても、第三者の目線は心を落ち着かせる要素になるだろうと考えました。

支援は、果たして専門職だけでやるものでしょうか。滞在時、ブログに「シェアハウスは人と人が出会う交差点だ」と書きました。介助者はわかるがわる出入りするし、外からポンとやってくる人もいます。私は、そこにゆるやかに介入できたことが嬉しかったのと同時に、それは、実はとても簡単なことかもしれない、と気づきました。何より輪に加わられて、私自身が救われました。

「迷惑をかけてはいけない」の呪い —原菜月

2022年1月、大学時代の友人である友子にレッツを紹介され、約1週間滞在しました。当時は適応障害の療養中でした。今思えば、体調を崩した原因は2つあります。1つ目は、「和を乱してはいけない」という強迫観念に近い感覚があったこと。2つ目は、他者からの目を気にしすぎていたことです。何らかの打開策になれば

と思い、レッツを訪れました。

まず戸惑ったのは、言葉を発しない人たちの接し方です。何て話しかければいいのか、そもそも話しかけていいのかもわかりません。「彼らにストレスを与えたり、傷つけたりしてしまったらどうしよう」とも思いました。ドライバーの音でシェアメイトを起こしてしまうかなと、深夜の脱衣所で10分ほど悩んだこともあります。

考えが変わったのは、スタッフの瑛さんと話してからでした。「他者は自分の思い通りにはならないよ。それは原ちゃんから見てもそうだし、相手もそう」と言われ、妙に腹落ちしたんです。レッツではペースを乱されることが多々ありました。構わず喋り続ける舞さん、周りを気にせずゆっくり動く太田さん、お店や道端で動かなくなる壮くん。やりたいことに突き進む彼らを、羨ましいとさえ思いました。突き進む分、トラブルも起きます。でも人間は自己表現する生き物だから、トラブルが起きるのも、完全に分かり合えないのも当たり前。そう思えて、気が楽になりました。同時に自分は「周りに迷惑をかけてはいけない」と思っていたことで、窮屈な社会を作るのに加担していたのだと気づきました。また、「障害がある人は庇護されるべき存在だ」と、どこかで決めつけていたのだと思います。比較的恵まれた環境で育ててもらい、忙しく働いていた自分も、福祉を必要とする一人の人間。そう思えたのは、大きな学びでした。

「いろいろな人」の中に自分もいる

～障害者施設と学校の協働による学び～

夏目はるな（クリエイティブサポートレッツ）



大人になると、「健常者」と「障害者」で切り分けて物事を考えがちです。でも若いころに障害がある人と学校や地域で関わった経験がある人は、「彼らも自分と同じひとりの個人だ」という感覚を持っていることが多い気がします。そこで私たちは、浜松市内のすべての小学校に「たけし文化センター連尺町」へ来てもらおう、と野望を抱くようになりました。お付き合いのあった佐鳴台小の校長先生に伝えたとこ、[行きましょう！]と即断してくださり、2019年7月に初めて「GOGO! たけぶん探検隊」が敢行されました。

小学3～4年生がたけし文化センターに計1時間滞するプログラムで、ガイダンスでは「いろいろな人がいるところです」「やってはいけないことや触ってはいけないものはないけど、ダメな時はスタッフから声をかけます」と案内します。先生方は、障害がある人に差別的な発言をしないように、施設のを壊さないようにと気を配るのですが、思うことに蓋をしないようにしたいし、普段から壊れることが想定内の現場なので、生徒への注意や声かけは我慢していただきます。生徒たちには「もくげきシート」と「これやったシート」を書いてもらいます。ポイントは「質より量」で、殴り書きでも良いんです。また、「関わってみたら?」といった声掛けもしません。最後に提出されたシートを読み上げる際は「なんであの人はずっと寝ているの?」などの質問が出ますが、こちらから答えは言わず、

反対に「なんでだと思っ？」と聞き返します。そもそもスタッフにも分からないことが多いからです。滞後は「もくげきシート」と「これやったシート」を見返しなが、誰かに探検報告の絵葉書を送ってもらいます。レッツへお礼の手紙を送ってもらうよりも、どんな場所で、何があって、何をしたのかを思い返してほしいし、誰かに伝えてほしいと思っているからです。先生方からは「学校でいわゆる優等生タイプではない児童が、レッツではのびのび楽しそうに過ごしていた」「一緒に遊んでいるおともだち、みたいな感覚で受け入れてもらえた」「触れ合えねば! という気持ちを全然持たないで自然に触れ合えた」などの感想が寄せられました。佐鳴台小の後、4校が探検しにきてくれました。

知的障害がある人は、子どもがたくさん来てうるさくしたり、普段と違うことが起こったりすると、パニックになるのではないかと思われがちです。でもレッツは普段からお客が多いからか、意外と大丈夫なんです。悲しげに顔を覆う人もいますが、たまにはそういう日があってもいいと思います。例えばファミコンが大好きな利用者はゲームに集中できないのが嫌で、集まってくる子どもたちを威嚇していました。でもその後は人が少ない場所へゲーム機を移動させ、同じ空間で過ごすための工夫をしていました。

1年ほど前、重度知的障害がある壮さんがショッピングモールのお菓子コーナー

に執着して動かなくなってしまう、2人のヘルパーが困っていたことがありました。そのとき、2人の男子中学生が「壮さんですよ?前にたけし文化センターへ行ったことがあって」と声をかけてくれたそうです。なんと、佐鳴台小の卒業生でした。

反対にレッツのメンバーが小学校を訪れ、風景にとけこむ「みにみにアルス・ノヴァ」も実施しています。これらの学習プログラムで体験してほしいのは「いろいろなひとの中に自分もいる」ということです。例えばレッツでは、どんなにうるさくても寝ている人、飛び跳ねている人、1日中ゲームしている人がいます。そんな人たちが自然に受け入れられ、のびのび過ごしている中で過ごす、「ふつつ」の幅が広がります。

「知的障害者とうまく関われば良いんですか」とよく聞かれますが、私たちが試行錯誤しています。「わからない」と切り捨てずに、自分の目でよく見て、あだるうか、こうだろうかと思いを巡らせ、少し関わってみる。自分もいろいろな人のひとりだと感じたり、「わからないこと」に向き合ったりすることで、他者とともにいることを豊かな学びの時間にしてほしいと思っています。

共に学び、生きる共生社会コンファレンス

「ともにいるだけで学びになる～福祉とアートの現場から～」

ラウンドテーブル

2023年1月21日に開催したコンファレンスから、ラウンドテーブルの記録を短く編集して掲載します。登壇者の情報は11ページをご覧ください。

アルス・ノヴァ (p.3 参照) 利用者の太田さんが中央の椅子に腰を下ろし、拍手が起きる。

高林 今回の「学び」は専門家に何か教えてもらうだけではなく、それぞれが自分自身の専門家として、当事者性を共有することでもあると思います。会場の皆さんや、目の前で遊んでいる子どもたちもそうです。彼らは今日、色々なことを伝えてくれました。太田さんや壮さんが舞台上上がったことで、子どもたちも進出してきましたね。

日比野 どんな劇場よりも劇場だね。(※舞台上に紙飛行機が飛んでくる)

久保田：舞台の前でみんなが遊んでいても、コンファレンスができないわけではない。ルールを外すと、色々な人が共にいられます。でも普通はやはり「やっちゃダメ」となる。

田中 今回、お知らせ文に「声が出てしまう人でも大丈夫」との呼びかけに加えて、「ちゃんと聞きたい人はご自身で席を変えてください」と書いてあり、すごく良いなと思いました。どちらか一方が配慮するのではなく、お互いに具合のいいところを見つけられるといいですよ。

世の中は「にじみ」の連続

久保田 会場全員が今日の状況を受け入れられているかは分かりません。色々な人の常識がある中で、どこに落とし所を見つけられたいと思いますか。

加藤 津田先生がキートークで話された居場所支援では「関わることでいさかいが起きる」というプロセスが織り込まれていました。みんないさかいを避けようとして、障害がある人と場を分けたほうが良いんじゃないか、と考えがちです。周囲がその事象をどう捉え直すかがヒントだと思います。

日比野 壇上に15人ほどいるけど、みんな絶対違うことを考えている。どうでもよいことをふと考える。みんな基本的にそんなに話を聞いてない。そういう能力が人間にはあると思うし、その柔軟性が面白いと思う。(※太田さんが隣に座る) …あっ、こんにちは。太田さんって、自分の世界から抜け出せない、出たくもないんだけど、良い具合に周りのものを取り込んでいってるよね。この状況って、「にじんでいる」のだと思う。世の中はにじみの連続で、にじまないようにすると、生きる力が弱くなる。そこで必要なのが文化やアート。安心してにじめるのは、レッツの魅力だよ。

田中 学校にアーティストが出かけていくことは、子どもたちがさまざまな人や出来事に出会うことだと思うんです。自分たちとは違う人に出会うことで、ひとりひとりが揺らぎ、更新されていく。新しい価値の発見にもつながるのではないのでしょうか。

中田 「ちゃんとしなきゃ」の呪いにかかっている人は多いと思います。「ちゃんとしなくていい人の居場所はありますか」という教育を受けてきたからです。ズレたものへの拒否感って、うらやましさを



伴っている気がします。「ちゃんとしなくても良いんじゃない？」という価値観をじわじわ広げていくのが、私たちメディアが考えるべきことで、日々悩んでいます。

無駄は、もっと大切にされて良い

津田 「創造的でなければならない」という圧が強まると、しんどいと思います。今、知的障害がある人と学生が「一番わかかってほしいこと」をテーマにミュージックビデオを作っているんですが、ある人は嵐の大野くんが大好きで。彼女のビデオは「大野くん大好き」、「結婚したい」、最後は「大野くんになりたい」で終わります。彼女にとっては、ひたすら表現することが大切なんです。もう一つ、今日の状況を社会に伝播していく方法ですが、この形で市長講演会をやっちゃえば良いと思います。「学び」は個人のもの、コミュニティのものがあります。レッツはコミュニティとして積み重ねた学びがあるから、今の状況を生み出せるんです。

ササキ 創造性のお話に関連しますが、壮さんの「アメ活」(p.4 参照)について話すと、「ただの消費じゃないか」とつまれてカチンとくることがあります。自分も含めて「消費=悪い」という呪いがあるのかもしれませんが、でも、消費の中にも色々な経験があります。創造性とはまた違う「手触りのある世界」をどうつくるか、考えたいです。

久保田 役立つことにお金を使うのは奨励されるけど、壮の場合、アメを食べずにためてしまう。無駄なことって、もっと大切にされて良いと思います。

神谷 紙一面に、ひらすらクレヨンで色を塗る利用者さんがいます。ご家族は「いつも同じような絵で、何を描いているのか分からない…」という感じですが、本人はすごく良い顔をしています。表現を評価するのは私たち、無駄と決めてしまうのも私たちですよ。私は「良いじゃん」という言葉が好きで、現場でよく発しています。

高橋 無駄と消費なら、うちも負けていません。娘は月6千円使って、買ったお菓子を瓶に詰めるんですけど、全く食べません。瓶に一度入れたものは捨てるしかない。本人の第一目的は詰めることで、それをやり続けるのが大切なんです。家族としては葛藤します。



高林 お金は何かをやるにはいけない理由にもなるけど、納得する理由にもなります。例えば亮賀さんは、大量のセロテープで壁にカレンダーを貼るので(p.3 参照)、「無駄なんじゃないか」とスタッフ会議の議題に上がりました。でもメンバーからは活動費をもらっていて、計算してみると、実はテープ代はたいしたことないと分かりました。

大橋 特に重い障害がある人の現場って、はたから見ると無駄の集結ですよ。でも悲しいことに、福祉現場でも「無駄を排して生産性を高めよう」という流れがあります。今は「障害がある人も働こう」の一辺倒です。



加藤 福祉現場では、職員がこういった話をするのも「無駄」と捉えられがち。レッツを見習って、対話の場を増やしたいですね。

第三者目線とアートの力

高本：私がレッツを知れたのはたまたま友達にいたからで、すごくラッキーでした。常識でがんじがらめの組織で生きてきた身としては、こういう場に関わるまでが難しいんです。他の人へ橋渡しするにはどうすれば良いでしょうか。

夏目 福祉現場では、職員が本人たちの幸せを願って一生懸命やっているけど、「そもそも幸せとは何か」という哲学的な部分で苦しんでいる場合があります。そこに風穴をあけられるのは、第三者の目線やアートの力だだと思います。

原 第三者としては、スタッフさんによく助けられました。レッツで誰かがパニックを起こすと、私は怖くて体が固まってしまうんですが、福祉に関わる以上「怖いと思っちゃダメだ」と最初は思っていたんです。でもスタッフさんが「驚いたでしょう」「正直居心地悪いんじゃない？大丈夫？」などと声をかけてくれて、窮屈さが減りました。

中田 レッツのような場に人を誘う橋渡しとしては「大変で分からない」と感じるものにあえて身を浸してみたら、あなたの荷が下りるかも」というメッセージが良いかもしれませんね。でも、真面目な人ほど「自分の荷下ろしのために障害がある人に関わろうとするのは搾取的じゃないか」と悩む気もします。

高本 最初は葛藤がありましたが、途中から「彼らを友達だと思えばいいや」と割り切りました。太田さんが手をタッチしてくれた。壮さんに音楽を聴かせたら、喜んでくれた。「何を考えているかわからないけど、今笑ってくれているからいいや」という、気楽なモチベーションです。自分の考え次第で関係性が作れると分かってからは、あまり悩んでいません。今も勝手に仲が良いつもりでいます。

原 レッツにいた頃はまだ体調が悪くて考えられませんでした。滞後にレッツの話をする機会が増え、葛藤しました。「レッツと出会って変わりました、めでたしめでたし」という物語に当てはめすぎたくないなと思います。人はそんな簡単には変わらないことを自覚しつつ、レッツでの学びを大事にしたいです。

日比野 人間って気持ちの生き物だな、とつくづく思う。分からないことは怖いから学ぼうとするけど、基本的には分からないものだらけ。そのモヤモヤとした分からないものを引き受ける領域として、アートという価値観があると思います。この領域があるから、分からないことがあっても動いていける。気持ちの生き物である人間は存在できる。それくらい、アートには必然性があると思います。

「恥」を知って強く生きていく

会場から 私はアルス・ノヴァに5年以上いて、今は会社で働いています。アルス・ノヴァで教わったのは、知識やルールではなく「恥」です。今日みたいに舞台上で音を鳴らしたり、紙飛行機を飛ばしたりするのも一つの恥です。ある日、「自分は周りからこう見られている」と気づいたんです。やめることはできないかもしれないし、しないかもしれない。ただ、恥を知って強く生きていくのが、障害者の世界だと思うんです。そういう世界に気づきがあって、修正する人もいるし、できない人もいるし、あえてしない人もいます。その積み重ねで、自分とはりあえず会社に入ることができました。「共にいるから学びになる」というのは、恥を一つずつ知り、教訓にできるかは分からないけど、とりあえず明日を生きる。そういうことだと思います。

文部科学省「令和4年度 学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」
共に学び、生きる共生社会コンファレンス
「ともにいるだけで学びになる ～福祉とアートの現場から～」

開催日時:2023年1月21日(土)13:30~18:30

会場:浜松市福祉交流センター ホール

主催:認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ、文部科学省

後援:浜松市

●ラウンドテーブル登壇者

日比野克彦

(アーティスト/東京藝術大学学長)

津田英二

(神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授)

田中真実 (認定NPO法人STスポット横浜)

高本友子

(新聞記者/たけし文化センターシェアハウス滞在者)

原菜月

(ライター/NPOスタッフ/たけし文化センターシェアハウス滞在者)

中田一会

(福祉をたずねるクリエイティブマガジン「こここ」編集長)

高橋久美子

(浜松市浜松手をつなぐ育成会 副会長)

大橋正季

(社会福祉法人ひかりの園 グループホームすてっぷ)

加藤真理子

(浜松市社会福祉事業団 相談支援事業所シグナル)

神谷京子

(社会福祉法人昴会 細江あすなろ作業所)

久保田翠、高林洋臣、 ササキユイチ、夏目はるな

(認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ)

「アート」を「学び」に置き換えてみた

～ただいるだけで学びになる～

久保田翠 (クリエイティブサポートレッツ代表)

私の長男、^{たけし}は障害支援区分6の最重度の知的障害者だ。彼は、入れ物に石を入れてカチャカチャとたたき続ける行為を寝る時以外ずっと行っている。小・中・高と特別支援学校で様々な訓練を受けたが、食事や排せつなどの身辺自立さえ身につけることができなかった。そして唯一手放さなかったのが「入れ物に石を入れてたたき続ける」行為だった。

レッツが提唱する『表現未満、』は、こうした行為を「その人を表す表現」として尊重していこうと呼びかけている。その背景には彼が全身全霊を傾けている行為を、迷惑行為、問題行動、役に立たないとされることが多く、それは彼の存在を全否定するのと同じだからである。そこでその行為を「表現」ととらえることで、まったく違う価値観をつくりたいと考えた。既存の価値観を変えてしまう、ひっくり返す。そして「問題行動なのか、表現なのか」という問いを社会に投げかける。『表現未満、』はアートの考えから生まれたコンセプトなのだ。

本事業は、「アート」を「学び」に言い換えて行った事業であった。重度知的障害者の存在を、取るに足らない、役に立たない、気の毒、と決めつけて思考を止めるのではなく、彼らの学びを考えることで、学びの概念自体の問い直しを行った。彼らの取るに足らない行為にも学びがあり、彼らとともにいることで周囲にも学びがあると考えたのだ。

言葉も行動も謎だらけの彼らとは、どう接していいかわからないところから始まり、やがて「ただそこにいる」「一緒にいる」だけでいいのだと気がつく。そして、何をやるわけでもなく、だらだらと過ごす。一見無意味な時間の在り方や使い方が、常に何かやることに追われ、成果が求められ、疲弊している私たちに新たな学びを与えてくれるのだ。そして、学びはだれもが享受できるものだ。言葉で意思を示すのが難しい重度知的障害者にとっての学びとは何なのだろうか。まだまだ多くのことが、ここから始まるのではないかと考えている。

文部科学省「令和4年度 学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」

ともにいるだけで学びになる ～福祉とアートの現場から～

発行 2023年3月

発行者 認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ

執筆・編集 原菜月(p.3,4,7~10)

デザイン ウエダトモミ(BOB.des')

〈お問い合わせ先〉

認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ

〒430-0939 静岡県浜松市中区連尺町314-30 たけし文化センター連尺町

電話 053-451-1355

Eメール lets-arsnova@nifty.com

ウェブサイト http://cslets.net/

いるだけで